

心理・適応6尺度と内田クレペリン精神検査による生徒理解

○西本素江¹・清重友輝²・中塚善次郎²

(¹徳島市城西中学校・²ひびきのさと人間精神学研究所)

1 目的

筆者らは生徒理解を深める心理・適応6尺度を構成した。その心理・適応6尺度と内田クレペリン精神検査により生徒理解を深める。

2 方法

2016年度に、中学3年生216名(男子97名、女子119名)を調査対象とし、心理・適応6尺度と内田クレペリン精神検査を実施し、その結果を次のように分析する。

内田クレペリン精神検査曲線類型判定10群別の上位判定群(第1群)と下位判定群(第9群以下)について、心理・適応6尺度との関係を検討する。

ここで言う構成された6尺度とは、1) 内的自己確立尺度、2) ストレス尺度、3) 家庭適応尺度、4) 他者・社会定位尺度、5) クラス・仲間適応尺度、6) 学校・教師適応尺度である。それぞれの尺度は、10の質問項目からなり、4件法で回答を求める。各尺度の α 係数は、1) 0.825、2) 0.937、3) 0.845、4) 0.787、5) 0.798、6) 0.835である。また、中塚(1994)の唱える「自己・他己双対理論」によれば、内田クレペリン精神検査は、能力も含め精神機能全般を測定していると考えられる。表1に示すように、ここで測られる精神機能全般とは、「自我一人格機能」以下「情動-感情機能」の4水準である。

表1 精神の弁証法的二重性と機能(中塚,1994)

自己のモーメント	他己のモーメント	固有な機能
自我	人格	統合性・目的性・一貫性
認知	言語	知能, 知識の創造と蓄積
感覚	運動	技能, 外界への適応行動
情動	感情	通心, 内界の心的な処理
個人的無意識	集合的無意識	遺伝形質と生の衝動 人類が共有する無垢なもの

3 結果とその考察

内田クレペリン精神検査の上位判定群19名とそれの下位判定群22名では、内的自己確立尺度を除く5つの尺度において、下位判定群は、上位

判定群に比べ、心理・適応6尺度のプロフィールが内側に描かれた。これは下位判定群の適応が悪く、ストレスが高い傾向を示している(図1)。

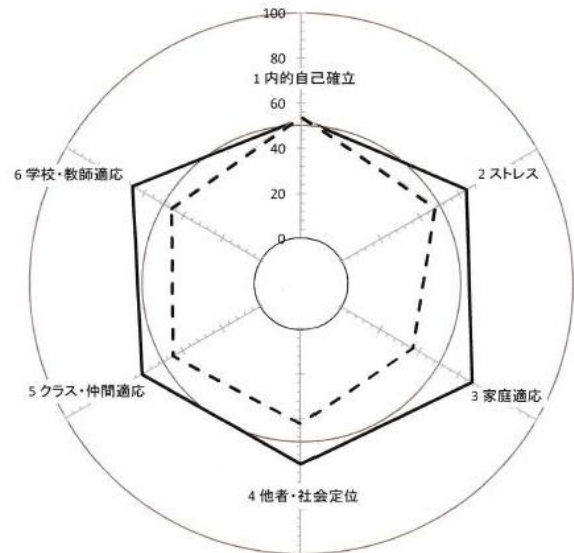


図1 クレペリン上位判定(実線)と下位判定(点線)の比較

次に、特徴的な事例を見ると、内田クレペリン精神検査の下位判定群の中に、学力成績は学年上位で、心理・適応6尺度の結果の良い者が2名含まれていることがわかった。質問紙形式の心理・適応6尺度は、主に認知-言語機能によって回答するため、心理・適応6尺度だけでは判明し得なかった精神機能全般の状況が、内田クレペリン精神検査によって測定されたと考えられる。これらの生徒は、認知-言語機能は優れているが、精神機能全般の統制がとれていないということが予想される。また、日頃の生活態度等の観察からも、この二人の生徒は、自己コントロールが苦手であり、落ち着きのない傾向が見られた。

これらの結果及び、担任や養護教諭のつかんでいる学校での生徒の様子や、家庭の状況等を考え合わせるにより、生徒理解が深まり、生徒への適切な言葉かけやカウンセリング等、生徒指導の参考になると考えられる。

4 文献

中塚善次郎(1994)「人間精神学序説」風間書房
中塚善次郎(1991)「内田クレペリン検査の新評価法」風間書房